

東京成徳大学中学・高等学校 2010年以降の受け入れ実績

2010年 9月 Henderson High School (Auckland, New Zealand)

ヘンダーソン ハイスクール (ニュージーランド/オークランド)

生徒 10名 (ホームステイ、ホテルステイ)、教員 2名 (ホームステイ、ホテルステイ)

本校 NZ 学期留学プログラム現地受け入れ校という縁より、同校初の訪日プログラム受け入れ校として協力することとなった。プログラム中の東京での3泊4日を本校が担当。ホストファミリーは、本校在校生の家庭で無償。プログラム全体はヘンダーソン HS が立案。2年に1度の予定で始めたプログラムだったが、プログラム担当者が産休に入り、2回目の実施が見送られることとなり、その後は実施されていない。本校の学期留学受け入れ校としては継続中。

2014年 6月 Thuc Nghiem School (Hanoi, Vietnam)

ベトナム実験中学校 (ベトナム/ハノイ)

生徒 14名 (ホームステイ、ホテルステイ)、教員 1名・添乗員 2名 (ホテルステイ)

朝日学生新聞社からの依頼で、滞在期間中の学校体験を本校が担当。プログラム中、本校が請け負うのは、日本の学校体験にあたる3時間分であったために、本校代表生徒との交流と昼食会で終了。

ホームステイは日本の旅行代理店がアレンジしている。

2015年 5月 Thuc Nghiem School (Hanoi, Vietnam)

ベトナム実験中学校 (ベトナム/ハノイ)

生徒 21名 (ホームステイ、ホテルステイ)、教員 1名・添乗員 1名 (ホテルステイ)

前年度の体験プログラムが好印象だったため、先方から学校体験プログラムについて直接打診があり、1日学校体験として実施することとした。内容は、代表生徒との交流に加え、茶道・書道体験と、1クラスと合同で特別授業を実施。

ホームステイは日本の旅行代理店のアレンジだが、次年度は本校生徒宅でのホームステイを希望している。

2015年 6月 Brigshaw High School (Castleford,UK)

ブリッグショウ ハイスクール (キャッスルフォード/イギリス)

※ウェストヨークシャー地方に位置する、近くの大きな都市はリーズ。

生徒 21名 (ホームステイ)、教員 3名 (ホテルステイ)

本校専任ネイティブ教員の前任校という縁より、同校初の訪日プログラム受け入れ校として協力することとなった。ホストファミリーは、すべて本校在校生の家庭で無償。滞在中のプログラムについては、ブリッグショウ HS 側の要望を取り入れたうえで、本校で作成。毎年の継続的な相互交流を前提にしており、本校からも1年以内の生徒派遣を準備中。

現状と課題について

①訪日プログラムについて

- ・金銭面の条件をクリアできれば、日本を訪れてみたいという数は常に一定数あると思われる。希望者数が増えているという実感はないが、円安傾向をきっかけに実施に踏み切っているグループが増えているという感じはする。
- ・1年間の長期留学の場合は、日本語を学びたい、日本文化を学びたいという強い意欲に裏づけられていることが多いが、短期の訪日プログラムの場合は、日本的なものに対する興味や関心が主体であって、「学ぶ」ことよりは、「見る・体験する」ことに主眼が置かれているように思われる。
- ・1週間程度の滞在では、学校体験から観光までを盛り込もうとすると、どちらも数時間程度の内容に制限されるために、学校であれば書道や茶道のような日本文化体験や、歓迎セレモニー的な特別授業に終始し、観光についてはツアーバスで巡るようなお決まりの観光コースか、ショッピング中心になりがちである。
- ・受け入れる側は教育的な目的があって来るのだろうと思っているのに、来日する側は観光中心のつもりで来ると、両者の意識のくい違いによるトラブルが起りやすい。
- ・事前の学校同士の打ち合わせが肝要である。プログラム実施の目的や意図についての共通認識、双方の要求や疑問点の洗い出しをおろそかにすると、長期の継続は難しい。

②受け入れについて

- ・双方の共通認識と関係者への周知がしっかりしていないと、多方面にストレスがかかる。
- ・短期の場合は、観光的な意識が強い場合が多く、ホームステイも宿泊費を抑えるための選択という感が否めない場合もある。日本文化体験としてのホームステイというお題目で実施していても、実際参加する生徒に相応の覚悟がないと、あえて自分から苦労したり理解するための努力をすることなく、4～5日我慢していればいいという態度に出てしまうこともある。

→受け入れるファミリーにしてみれば、精一杯日本的なものを味わってもらおうと手を尽くしても、来る側に最初からチャレンジしようという気がなければ、徒労に終わるだけのことである。往々にして、日本の家庭はこういう場合、お客様に不快な思いをさせないようにと気を遣うので、た

まったフラストレーションを家族間でぶつけ合うことになりがちである。

- ・来日前にホームステイの心構えとして必要なことを指導してもらうように要請することや、より具体的に日本での日常生活に関する情報や注意点などを提供する必要がある。ホームステイはホテルではないので、日本の生活や日本語を学ぼうとする意欲のない生徒が参加することのないように、あらかじめ申し合わせておくべきである。また、各校は自校の生徒を渡航させる前に、十分に現地で指導する責任がある。

③学校間交流の取り組みについて

- ・募集から引率までを、限られた人員や部署だけでおこなっていると、負担も大きく長期継続がしにくくなる。学校全体の取り組みとして、直接かかわりのない教員の理解と支持も必要。
- ・制度として留学生の受け入れを確立している学校はそう多くないので、日常の授業にイレギュラーな形で参加するケースが多い。日本側の担当者も、平常の仕事と並行しての対応となり、場合によっては授業の代講が発生することもある。

→たとえば留学がビジネスとして成立している NZ では、各校に留学生専用のセクションと専任スタッフがおり、授業を持たない教職員として勤務しているため、長期・短期に関わらず留学生のケアに集中できる。ただし、このようなシステムを導入するためには、期間・内容にかかわらず、留学生からは費用を徴収することが必要。ボランティアでできることには限界がある。

- ・交流を継続させたいのであれば、双方向で継続してできる取り組みを考えることは重要。PC などを利用した共同作業や討論などは、以前より敷居が低くなったが、下級生に引き継がれていく内容にしていかないと、年間を通した交流が希薄になり、何かのきっかけで来日あるいは訪問が途切れた時に、翌年のプログラムが続けにくくなりがちである。
- ・日本の学校の授業の特殊性は自覚した方がいいと思う。海外の授業のスタイルを全面的に導入することがよいとは思わないが、いわゆる欧米圏での授業スタイルはどのようなものなのか、優秀な生徒の尺度とか判断基準とかはどのようになっているのか、ということを知ろうとする姿勢は海外の学校と交流しようとする学校には必要である。残念ながら、日本の授業スタイルになじまない留学生に対して、素行が悪いという評価を下す場面もあるのが現実。